

# 国 語

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

I 都市の景観が語られるのは、旅行者のためであることが多い。一八七二(明治五)年の銀座煉瓦街計画は、船で横浜にジョウリックした外国人たちが、汽車で新橋に着いて東京の街に入る時に、真っ先に通る銀座通りを西歐に劣らない洋風の街にした。住む者のためではなく、彼らに見せるためだった。幕末に結ばれた不平等条約を改正するには、来訪外国人に日本も欧米並みの文明国であることを示したい。都市景観は日本の地位を高める外交手段だった。

II 一方で、都市は生きた人間の□□のためにあるから、景観が市民にとってどのような意味を持っているかが問題だ。観光都市の場合には、生活者の多くが直接・間接に観光業に絡んでいて、旅行者にとって好ましい景観は、観光業にとっても好ましいし、生活者にも好ましいものとして直結する。だが、一般都市の場合には、来訪者にとって好ましく思えることが、生活者にも好ましいとは限らない。

III 旅行者にとっては、普通では見られない珍しい景観が好ましいだろう。その地域の伝統的な珍しい景観が、生活者にも好ましいなら問題はないが、生活者は世の中一般に流行している便利な生活にも憧れる。そのために、流行の物を取り入れると、従来の個性がなくなって景観が損なわれ、来訪者がかかりさせる。かといって生活者に不便を強いるのは問題だ。こうして、旅行者と生活者では景観に関する考え方にズレが生ずる。観光業以外の人々には、来訪者は静かな生活を邪魔する歓迎されない人々かもしれない。

IV 個性ある景観は、その生活者によってつくられ維持されてきたものだから、誇りであり愛着がある。自分たちのアイデンティティを失ってまで流行を追い、便利や安楽だけを求めているのか——それは、自分自身の問題として考えるべきことだ。

V 地域は生活者が好ましく生活していることが大切で、その生活のなかで形成された景観が、旅行者にも評価されることが一番望ましい。生活者が

誇りを持ち、愛情をもって育てた景観でなくては、他人を感動させることはできない。また、大切にしている景観でなければ、ゾクゾクするはずはない。それが伝統的景観になる。

(注) 銀座煉瓦街計画——銀座通りを洋風建築のモデル地区とする計画。アイデンティティ——自分らしさ。自分自身の独自性。

問一 傍線部①・⑤・⑥・⑧について、片仮名は漢字に改め、漢字はその読み方を平仮名で書きなさい。

問二 傍線部④から用言を二つ抜き出し、それぞれ品詞名も書きなさい。

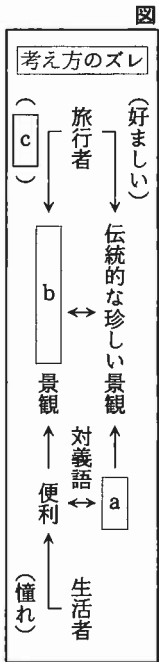
問三 傍線部②のようにした目的は何か。それを説明した次の文の空欄に入る適切なことばを、本文中から十字以内で抜き出して書きなさい。

問四 「銀座煉瓦街」を引き合いに出した筆者の意図を説明した次の文の空欄に入る適切なことばを、十五字以内で書きなさい。

問五 空欄に入る適切な漢字二字のことばを、本文中から抜き出して書きなさい。

問六 傍線部③と対比して用いられていることばを、本文中から抜き出して書きなさい。

問七 傍線部⑦について、IIIの段落を整理した次の空欄a～cにそれぞれ適切なことばを書きなさい。ただし、aは本文中の二字のことば、bは二十五字以内のことば、cは二字の心情を表すことばとする。



問八 本文における筆者の主張について、IV・Vの段落をまとめた解説欄の文の空欄に、三十文字以上四十文字以内の適切なことばを入れて要約しなさい。

二 次の文章は、中学二年生の修と昭が、同級生の英雄に誘われて釣りを  
する場面である。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

「雑魚のやつらは、流れの早い瀬とゆっくりとしたよどみの境目あたりに  
集まってんだ。そこへ、入れれば寄ってくっべ」

英雄は修に講釈をしながら、塩辛が入ったカゴを流れに乗せるように水  
に入れた。修も昭もカゴが茶褐色の川の波間に消えるのをにらんだ。カゴ  
はねらい通り、よどみと急流との境目付近に沈んだ。

修と昭も英雄が糸を垂れた付近に釣竿を垂らした。カゴのえさのにおい  
に引かれて寄ってくる魚たちをねらうのだ。修たちはぐっと水面をにらみ  
ながら待った。握った竿に微妙な震動が伝わってくる。神経を澄まして魚  
が針にかかるのを待ち受けた。

濁流の中を泳ぐ魚の様子を心の中で想像した。何十匹もの雑魚たちがえ  
さのにおいに引き寄せられてくる。英雄は何度もポイントを変え、魚信が  
竿に伝わるのを待った。修も固唾をAで竿を動かす。

「来た！」英雄が大声で叫んだ。  
英雄は釣竿をぐいっと引いた。流れにカゴを乗せ、巧みに河岸へと寄せ  
た。茶褐色の波間に魚の白い鱗がきらめいた。

修は自分の竿を河原に放り出して、英雄の釣り上げた魚に駆け寄った。  
英雄も竿を河原に置き、道糸をたぐりながら、魚を浅瀬に引き寄せた。

「大物だあ」  
ヤマベが銀色の鱗をきらめかせて浅瀬を跳ね回っていた。修は河原の石  
と石の間に挟まったヤマベを両手で押さえた。ヤマベは手の内で暴れ回っ  
た。ぬるぬるとした感触は少し気持ち悪かったが、生きた命をてのひらの  
中にしっかりと捕らえる満足感があった。

英雄は魚籠のふたを開けた。修はつかまえたヤマベを魚籠の中に放った。  
魚籠の中に入れたヤマベは大人しくなり、口をばくばくさせていた。  
ヤマベトクユウの斑紋が見えた。英雄は魚籠を浅瀬の水に浸け、石で周り  
を囲んだ。

修は自分の竿を拾い上げ、糸を引き上げた。釣針にはミミズがついてい

なかった。修はまた新しいミミズを缶からつまみ、針に刺してつるした。  
英雄も大急ぎで針にえさをつけ、カゴを流れに乗せてよどみに戻す。

「今度は、もっと大物を釣るぞ」  
英雄は得意気に鼻を動かした。

「――釣れたッ」

今度は昭が大声で叫び、竿を上げた。濁った水面から小ぶりだが元気の  
いい雑魚が糸に引かれて躍り出た。雑魚は宙に銀色のしずくをまき散らし  
た。昭は雑魚を手もとに引き寄せ、Bした顔で魚を針からはずし、  
魚籠に入れた。

「ま、ちっこいけど、釣れねえよりはよかんべ」  
昭は嬉しそうに歯を見せて笑った。

「俺の方にも、魚、来ねえかな」

修は濁流で渦巻く川の流れをにらんだ。魚がムれていそうな場所にえさ  
を入れているのに竹竿にはびくりとも、魚信はなかった。

それでも修は満足だった。足もとを勢いよく流れていく水面を見ている  
と、自分のからだが上流に向かって動いているように見えてくる。耳を響  
する川の音は船の船先が荒海の水面を分けて進む音だ。修の船はぐんぐん  
と速度を上げて突進する。

手にびくっという魚信があった。修は我に返った。竿の先が丸くしなっ  
ていた。びんと伸びた道糸が急流の方に入ろうとしていた。

「オサム、引け」

英雄の声に、修は夢中で竿を上げた。瞬間、灰色の空に魚が舞った。銀  
白色をした腹が光った。赤味を帯びた斑紋が横腹に見える。

「マスでねえか？」

「いや、ちがう。ヤマベだ」

修は竿を立てた。道糸につるされた魚が修の手もとに飛んできた。修は  
大きなヤマベを手でつかまえた。英雄の獲ったヤマベよりも、ひと回りは  
大きい。てのひらの中で逃げようと暴れる魚を握りながら、修は歓声を上  
げた。すぐに川の音が修の声を吹き消した。(森詠「少年記 オサム十四歳」)

(注) カゴ——英雄の釣糸についた、魚を集めるためのえさを入れるカゴ。

魚信——釣りで、魚がえさに触れたり、食いついたりすること。

ヤマベ——サケ科の魚。ヤマメ。

耳を聳する——耳を聞こえなくするほどの。

問一 傍線部②・⑤・⑥・⑦について、片仮名は漢字に改め、漢字はその読み方を平仮名で書きなさい。

問二 空欄Aに入る適切な二字のことばを平仮名で書きなさい。

問三 空欄Bに入ることばとして適切なものを次のア～エから選んで、その符号を書きなさい。

ア ほくほく イ さばさば ウ くよくよ エ いらいら

問四 傍線部①について説明した次の文の空欄に入る適切なことばを二十字以内で書きなさい。

修と昭は、英雄の操るカゴが、英雄の [ ]。

問五 傍線部④について、英雄が釣り上げたヤマベに対する修の感動を説明したことばを、本文中から二十五字以内で抜き出し、最初と最後の三字を書きなさい。

問六 二重傍線部 a～d において、作者は英雄をどのような人物として描いているか。解答欄のことばに合わせて十五字以内で書きなさい。

問七 川の流れに我を忘れて修の気持ちが最も反映されている表現を本文中から二十字以内で抜き出し、最初と最後の三字を書きなさい。

問八 傍線部③・④に共通する表現について説明した次の文の空欄に入る適切な漢字二字のことばを書きなさい。

[ ] の対比によって、ヤマベの美しさを際立たせている。

問九 傍線部⑧から傍線部⑩に変化した修の気持ちを説明した次の文の空欄 a・b に入る適切な十五字以内のことばをそれぞれ書きなさい。ただし、b は本文中のことばとする。

三人のうち [ a ] 状況でも心が満たされていたが、自分で釣り上げた [ b ] ことで、喜びが頂点に達した。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

春に遊ぶものの中には、胡蝶ことうの軽らかに、此見こゆる菜の花にところ得て

(思われて)

飛びかふは、何がしの夢もおぼえてをかしきを、蜂はちの晴れたる日かけに何

(日差し)

ごとにかあらん歌ひて遊ぶは、なほまさりて心地よげなり。されどにくき

針のあるをいかがはせん。蛙かたの忍びに池の面にささやくがごととなるがおも

(やかましく)

しろきを、此もやがてかしがましくやならん。およその皆さかりを愛あづ

(古今和歌集以後は)

るがおほかるを、これは古今集よりこなたは、春のものと定めたるもいと

理ことわりにおぼゆ。

(伴蒿ばんこう『閑田文章』)

問一 傍線部①の意味を現代語で書きなさい。

問二 傍線部②に意味の上から読点(、)を一か所つけるとすれば、それはどこか。解答欄の例にならって、適切な部分に読点を書きなさい。

問三 傍線部③は、何について述べたものか。本文中から適切なことばを抜き出して書きなさい。

問四 傍線部④を現代仮名遣いに改めて、すべて平仮名で書きなさい。

問五 傍線部⑤を説明した次の文の空欄 a～c に入る適切なことばを、それぞれ現代語で書きなさい。ただし、a・b は十字以内のことば、c は二字以内のことばとする。

何事も勢いが盛んなときの様子をほめたたえるものだが、蛙は夏に

a 様子よりも、春に [ b ] 様子の方が勝っているため、和歌の世界で春のものとして詠たんできたことについて、筆者はたいそう [ c ] している。

四 (選択問題) A、Bから一題を選んで、解答しなさい。

A 次の詩と鑑賞文を読んで、あとの問いに答えなさい。

風の思想

大岡信

地上におれを縛りつける手があるから  
おれは空の階段をあがつていける

① 肩をゆすつて風に抵抗するたびに  
おれは空の懐ろへ一段一段深く吸はれる  
地上におれを縛りつける手があるから  
おれは地球を吊りあげてゐる

(鑑賞文) この詩は、誰でも知っている「風揚げ」という遊びを、風の立場で語るというユニークな着想によって書かれている。「おれ」は、最初徐々に地上から離れ、途中からは空から引張られるようにさらに高く舞い上がっていく。そして第三連で、「おれ」は、はるか上空から地上を見下ろしながら、自分が

a という状況を、

自分が「地球を吊りあげてゐる」と言ってみせる。人間と風の立場を逆転させることで、「おれ」の「b」を表現しているところが鮮やかである。

問一 傍線部①はどのような様子を表現したものか。次のア～エから選んで、その符号を書きなさい。

ア 向かい風に立ち往生する様子  
イ 向かい風に立ち向かう様子  
ウ 追い風にうまく乗っている様子  
エ 追い風に押し流される様子

問二 傍線部②は詩の中ではどのように表現されているか。十字以内で抜き出して書きなさい。

問三 空欄 a・b に入る適切なことばを書きなさい。ただし、a は十字以内のことばとし、b は次のア～エから選んで、その符号を書きなさい。

ア 対抗心 イ 向上心 ウ 探求心 エ 自負心

問四 この詩には、風以外に、人でないものを人のように見立てて扱っているものがある。それを抜き出して書きなさい。

B 次の漢詩と解説文を読んで、あとの問いに答えなさい。

郭司倉を送る

王昌齡

門に映じて淮水緑なり

騎を留む主人の心

明月良椽に随ひ

春潮夜夜深し

(注) 司倉—倉庫をつかさどる役人。  
淮水—大河の名。  
良椽—立派な役人。

① 送 郭 司 倉

王昌齡

映 門 淮 水 緑

留 騎 主 人 心

明 月 随 良 椽

春 潮 夜 夜 深

(解説文) 作者は、転任する友人を見送るため、夜に宴を催し、その席でこの詩を詠んだと思われる。まず、第一、二句で、月の光を受けて輝く淮水の緑と、騎上の人を引き留める人の気持ちを述べる。そして、第三、四句で、月が立派な役人に付き従ったように見えなくなった時、川の流れば夜ごとその水かさが増すだろうと述べる。「a」は友の清らかな人格をイメージさせ、対に並べられた「b」に、残された人の静かに深まる思いを重ねることで、美しい情景とともに作者の気持ちを切々と伝えていく。

問一 書き下し文の読み方になるように、傍線部①に返り点をつけなさい。

問二 傍線部②とは誰のことか。漢詩の中から抜き出して書きなさい。

問三 空欄 a・b に入る適切な二字のことばを、漢詩の中からそれぞれ抜き出して書きなさい。

問四 傍線部③は、どのような気持ちか。「友」ということばを用いて、解答欄のことばに合わせて十字以内で説明しなさい。